うもなにか気づくことがあるようなのです。このようなメリットは、発表の機会が比較的ない若手研究者にとっては大事なものと思われます。

今後の計画

今回の研究会の解散後、希望者を募り岡山駅前の居酒屋で次回以降の計画について話合いを行いました。

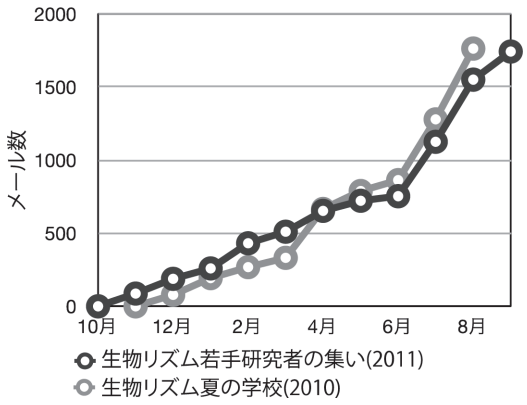

図１　世話人間メール数（累積）の推移

この研究会が来年以降継続するのか、また継続するとしたらどのように運営し、どのような形態をとっていくのかという点に関して話は出ましたが、まだほぼ未定であります。来年の会はまた新しい世話人の構成で今後一から計画をたてていくことになるでしょう。世話人として若手研究会の運営にご興味ある方はbiological.rhythms2011@gmail.comまでご連絡いただければ幸いです。

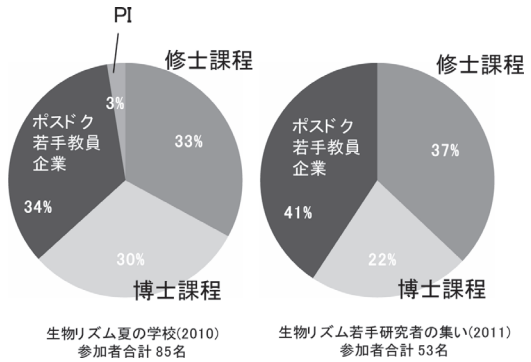

図２　参加者内訳

「生物リズム若手研究者の集い2011」に参加して

久保達彦
産業医科大学　医学部　公衆衛生学

少数であった臨床分野からの参加者の一人として、参加記を記すようご指名をいただきました。第一回開催の昨年を含め２度の参加を通じて感じたことを報告させていただきたいと思います。経験の浅い若手の雑感に過ぎませんが、ご容赦いただければ幸いです。

そもそも日本時間生物学会への入会のきっかけが、昨年の夏の学校に参加したことであった私にとって、夏の学校への参加は時間生物学会関連行事へのファーストコンタクトでした。夏の学校に参加して、まず驚いたことは参加者の研究対象の多様性でした。哺乳類実験動物はもちろん、鳥類、魚類、昆虫、植物、細菌、真菌、数学、物理、そして時々、ヒト。「共通点はリズムというキーワードのみ」の言葉に偽りはなく、時間生物学という名のもとに、これほど豊かな研究世界があることを知ってとても驚きました。暑い検見川からの帰り道、医学領域に閉じこもっていた自分の不明を知り、そして自分の仕事に有益な情報を山のように得て、上気した心持ちで帰宅の途についたことを今でも覚えています。岡山で開催された今年の夏の学校では、最初のプログラムは粂和彦先生と岩崎秀雄先生の対談でした。話題は科学に止まらずアートや社会時事問題にまで及び、その懐の広さには科学的刺激以上のものをいただきました。本間研一先生の時間生物の歴史を俯瞰するような講義や、初心者には大変ありがたい超入門講義などなど、プログラムは多様、かつ、それぞれのプログラムの意図が昨年に増して明確に打ち出されているように感じられました。講演後の質疑応答も自由な気風に満ちており、学術的質問から恋愛相談と思われるようなものまで議論は多彩でした。夕食後に開催されたグループディスカッ

ションは今年も大いに盛り上がり、様々な研究テーマに取り組む若き研究者の情熱あふれる研究紹介やディスカッションが深夜まで続いていました。

私自身は慢性的な概日周期の乱れにさらされている交代制勤務者の、癌を中心とした疾病リスク評価に関する疫学研究に取り組んでいます。泌尿器科医であった私が、この時間生物学的研究テーマについての研究を始めた当初、時間生物学に取り組む研究者は私の周囲には皆無であり、私は時間生物学研究者との交流に餓えていました。研究に取り組み続ける過程で日本時間生物学会を知ることになったのですが、すぐに入会とはなりませんでした。加盟学会が増えることへのいくらかの抵抗感と、ヒトの、それも実験環境ではない労働現場の生データを扱った研究に取り組む者の参加が許容されるものなのか、いささか不安に感じていたからでした。しかしながら折りよく開催された魅力溢れるプログラム満載の夏の学校にまず参加させていただき、その学際性にふれて私の懸念は杞憂だと知り確信をもって日本時間生物学会に入会させていただくことになりました。入会のきっかけを与えてくれた夏の学校には、とても感謝しています。

ところで２年連続の参加となった今年、私は世話人の方々の苦労の一端を知ることになりました。それは多用な学術分野からの参加者の募集についてです。多様な参加者を呼ぶことはspecificな研究課題について討議を求めて参加した研究者からすれば、ある意味ではディスカッションの効率は落ち、またオーガナイザーの立場からすればマネジメントはより困難になると思われます。実際、参加者から「ディスカッションが深まりやすいので、同じ領域の参加者の交流を優先する形態のほうがよいのではないか」という声も聞かれました。

何をもって「会は成功した、参加してよかった」と判断するかは参加者によってそれぞれ異なるに違いません。また判断の時期（参加直後に判断するのか、数年後に判断するのか）にもよるでしょう。一般的に若手は将来に続くキャリアをつかみ取るために成果と評価に餓えていますし、研究者としての将来への不安も抱えるなかで効率や即効性を常に求めるのは必然のようにも思います。

ただ、そもそも「生息する地球の周期性に対応した生命の多用な営みを解明し、その知見に基づき人類の生活に視することが時間生物学の目指すところ」［１］であり、「時間生物学は周知の通り、様々な分野の研究者が参加する学際的学問」［２］として発展してきた経緯があるそうです。また研究室を離れて合宿形式を取る理由には「学会のときくらいは、ゆっくり議論したい」［３］ということも実感としてあるように思います。「発展を支えるのは若手の研究者であり、彼・彼女らがのびのびと研究をできる条件を整えることが重要」［２］との温かい視線で我々を見てくださっている指導者層の先生方もいらっしゃるのですから、この時ばかりは効率性を少し脇に置いて、異分野交流を楽しみ、新たな学友づくりに励むのも悪くはないのではないかと個人的には思います。思い起こしてみれば、今回の夏の学校で講師の労をお執りいただいた先生方は、どなたも学術的な輝きだけでなく器の大きな人としての魅力にも溢れていました。その魅力は効率性とは趣を異にするもののように思います。また、異分野の方に自らの研究テーマの成果や面白さを伝え、また自らも傾聴することは、プレゼンテーションスキルを鍛え、自らの学際性を育てるとてもよい機会でもあるのではないでしょうか。

それにしても会をまとめ上げた世話人の方々のご苦労は大変なものであったと思います。幾人かの世話人の方には会場でお礼を申し上げることができましたが、全ての方にお話する時間はありませんでした。この場を借りて、御礼申し上げたいと思います。素晴らしい学びと交流の場をつくっていただき、ありがとうございました。私自身は夏の学校参加をきっかけにして、いくつかの研究交流を具体的に開始させていただくことができました。夏の学校が終了した今は、その成果を日本時間生物学会学術大会に報告させていただく日を目標に、引き続き研究に励んで参りたいと思います。（2011年8月27日：EBRS開催中のオックスフォードにて）

１）近藤孝男．時間生物学．17(1): p2(2011)
２）海老原史樹文，時間生物学．17(1): p3(2011)
３）冨岡憲治．時間生物学．17(1): p1(2011)